ストーリーキャッチャー

Kevin Spring

むかしの恋

　たいしてあてもなく、ただ、運動になるだろうという理由だけで、バスに乗り、軽いハイキングができるあの山へ向かった。山といってもまあ、本当に小さな山で、決して辺鄙な場所ではなかった。終点までには、学校もいくつかあったし、研究所らしき建物もあった。ファストフード店やコンビニもあった。私はぼんやりと窓の外を眺めていた。山道をカーブに沿ってバスは走る。ああ、こんな竹藪みたいなところに家があるんだーっと見知らぬ人の家の門が目に入ってきた。すると物語も一緒に入ってきた。貧富の差のある恋人同士の結ばれなかった恋愛。よくあることだ。それだけでは終わらず、いつまでも私の中のどこかで、その物語を再生しようとしているのが感じられた。何かそれについて考えようとすると、停止して、ぼんやりすればするほど、語りたがってこぼれてくるのだった。１２～１３歳くらいの女の子が現れ私にほんのひと断片を見せた。長い髪をいつも結っていること。しめ縄のような太さではなく、細く柔らかい感じだ。この女の子がいつかの私なのかと思ったのだがそれは違うと感覚的に分かった。私はこの女の子を見ていた側の人間だ。もしくは犬とか猫とか。と、このへんまでわかったところでバスは終点に着いた。私はゆっくりと一番後ろの席を立ち、下車した。山をさらに登るためのバスもあったのだが、歩くことにした。妙な言い方かもしれないが、早く消耗したかったのだ。私には今ぼーっとすることが必要だと感じる。誰かにそう言われたわけでもなければ、確たる目的があるというわけでもない。

私A

　朝目覚めると隣には女が眠っている。床から出て、決められた仕事をする。きらびやかなドレスを着て自分の美しさをさりげなくアピールしつつ感謝の言葉を吐き出す。それが私の仕事。男の視線を感じながらまたあの女ばかりの宿舎に帰る。寝る時間になると、見回り女がやって来る。前は鍵、あたしが管理してたんだけどね、と隣のベッドの女が言った。いつも私の所に潜り込んで眠っているのはこの女だ。見回り女は私に聞いた。
「あんたは何をしたんだ？」
私は記憶を整理する。
お前は人殺しだ。私は目の前で女が死ぬのを見た。私が殺した。殺してなんかいないと思いたい。これは私の記憶なのか。記憶は事実か？
「私は…」
あの女は死んでいないのかもしれない。いや動かなくなって硬くなるのを見た。今は正気でいられてもいずれ亡霊に悩まされて気が狂うかもしれない。私は誰も殺していないとしても？でも、殺していないとしたら私はここを出て行かなければいけないだろう。私の記憶はここにいるところからはじまっているから、つまり生まれてこのかたここにいるんだから、他にどんなとこがあるのか知らないし、どんなだかも想像つかない。誰もまだ私が人殺しだなんて知らないのは幸いだろうか。
私は何もやっていないくらいの軽い罪を犯したような素振りで日々の生活を送った。ある日知らない女が人殺しをしたからといって連れて行かれた。私が殺したはずの女を、その女は殺したと言ったのだ。私はただその、連れて行かれる女の長い髪を見ていた。私の記憶が奪われてしまったようだった。それで私はまた一からやり直し。また、なにでもない私。

　わたしったら物の買い方も分かんなくなっちゃって、パンを２個手に持ったまま店を出たの。お金払わないでね。あれって思いながらも袋を開けて口に放り込みながら歩いたんだ。そしたらまた店があってそれもさっきの店とは全然明らかに違う店だったんだけど、わたしはその店に入って平然とパン２個の代金を払おうとしているんだ。店主の男はわたしがスムーズに財布を取り出せるようにと、バッグと着ているコートまで預かって、息子らしき子がそれらを店の奥に置いている。わたしはさっさとパン代３００円の小銭を店主に渡した。どうやらわたしの買い物の仕方は合っていたようだ。少し待ったが、返す気配がなかったので、バッグとコートを返して下さいと言うが、何の事だとしらばっくれられた。わたしは男の子が手にしているコートを指さしてちょっとおおげさに、それは私のですどうか返して下さい、と言った。そんなさなか、新たに来客があった。すばらしい肉厚の男で、わたしはその男に巻かれるからコートのことなどどうでもよくなり、肉板に顔をうずめた。男は耳元でささやいた。
おまえの家、カギがあいていたぞ。
なんて図々しい。わたしは肉厚男から離れ、店の奥へ上がり込みバッグとコートを男の子の手からふんだくった。入口を塞ぐ肉男をどいてと押すが、ぷるんともしなかった。彼奴は両手をあげて迷惑そうに引き下がった。急いで家に戻ったが遅かった。知らない家族だか仲間がぎっしり詰まっていた。あんたも入るってのかい、という目で見られたがわたしだけの家を知ってしまっているわたしには到底無理だった。今度はわたしがどこかの家を奪う番だ。

かげうすの私

　よくさあドラマなんかの人間関係の説明で矢印が付いた図があるじゃない。→好き←ライバル、とか。近頃あたし、あれが見えるんだ。なんかのタイミングで。電車ん中で、こいつら話噛み合ってねーなって思ってたら、→バカにしている←とかね。でも別れ際また飲もうねアー楽しかったとか言ってっからもうねあたしはいやになっちゃうよ。みたまんまじゃねえか、と。他人のそんなんみて最初は楽しんでたんだけど、だんだん自分に関わる人はどうなんだろうかって思うようになったのね。まーでも、びっくりするくらいあたしに誰も関心持ってないこと。世の中のつまはじき者。そう思うと、嫌われていてもいいからあたしに向けられる矢印が見たくてたまらなくなるわけだ。矢印プリーズ。好意を持っている→でもいいんだけど、これは赤い糸じゃないから手繰り寄せることはできないんですよ。これを見るためには学校に行くなり仕事するなりするといいかもな、って思いついたの。金を払うか、貰うか。それで労働に手を染めることにした。影薄でいるとまた相関図に入れなくなるから、ぎらぎらしていたの。それでもだあれもあたしに見向きもしない。もうあきらめかけたとき、ひょろっひょろの矢印があたしに向ってきたの。→あの人は生きているのか？

メッセンジャー鳥

　よし。船出だ。水に浮かんでいた船は動き出す。が、目の前にはいかにも硬そうなアスファルト。船頭は目前に水がなかろうと構わず進む。最近の船はこうなのかと、感心していると、上り坂のアスファルトをずりずりと下がっている。船頭は、ははは、やはり無理だったかと笑う。今となっては湖上。僕の隣つまり船頭の真後ろに男。くすりとも笑わないまるで港のテトラポットみたいだ。彼の場合２本しか足はないが。呼べば必ず止まる男ってのがいるらしい。野生の鳥をだ。呼んでいないのに止まるのに、呼んだらどれだけの鳥が彼のところへ押し寄せるのだろう。男は言う。呼ぶ時は一羽に狙いを定めて呼ぶんだ、と。彼の肩に鳥。僕は呼ばれていない鳥を間近で見る。人間でいえば色白ぽっちゃりで童顔の小娘といったところか。男は相変わらずの姿勢で、船頭の隣の女に、なにか悩みを言ってみろと言う。鳥はそこらへんの人間よりも大事なメッセージを伝えてくれるんだと。お前は知っているだろう？と男は僕に肩を寄せてきて鳥を僕の所へ寄越した。僕は耳の穴がついばまれるんじゃないかと気が気じゃなくて、早く女の人に何でもいいから悩みを言って欲しかった。さすがの鳥だって、聞かなくちゃ分からない。みんなたぶんじりじりしていた。男も船頭も女も当然僕も。やがて女はそんな空気に耐え切れなくなって、あるいわあまりの悩みの多さに追い詰められ、ほっといてよ、と言った。色白ぽっちゃり娘は、その見た目の愛らしさとはかけ離れたどす黒い声でしゃべり始めた。貴様の悩みを言ってやろうか、ええ！？鳥がぱくぱくと小さなくちばしを動かしているのを僕は感じた。もれる息がすかすかと間抜けな音をたてながら僕の耳に恐怖を与えた。このままでは、この女の人をめためたに打ちのめしてしまう。あらゆるものを掘り起こしてしまう。僕はそう思った。その鳥は未だ僕の肩にいる。隣の男は突然手を叩きこう言った。呼ばないのに来る奴はこれだからいけない。そしてポケットから米粒をわし掴んで水上目がけて投げた。そんなことしなくても、とっくにいなくなっていた。呼ばれていない鳥だって、びっくりするんだ。僕は急に呼ばれてない鳥が不憫に思えてきた。よし、僕が呼んでやろう。だけど僕はまだ、鳥の呼び方を知らない。

　ドアを開けると二枚の表札を男に見せられた。そして、男はこう言った。
「あなたは、ご近所が騒がしいとかで、よく通報するでしょう？」
私は男が、右手に持っている名前を指して、
「そう、うちの右隣の人、たぶんそうです。うるさいんですよ」
男はゆっくりと首を横に振る。
「いや、左。左隣の人、男の人ですよ。たしか、イラスト？マンガ？なにか書いている人です。とにかくうちのアパートの誰かに違いないんです」
男はまだ、首を横に振り続けている。
「本当ですよ。他の家の人にも聞いてみて下さいよ」
「私は警官です。これ以上このことで騒ぐとあなたを連行しますよ、いいですか？」
「どうしてですか？私は何も悪いことしてません」
「確かに。おっしゃる通りです。ですが…あなた、まだお気づきになりませんか？」
「…」
「いいですか？誰も騒いでなどいないんです。そんな人はいない。…つまり、騒ぎ奇声をあげ、何かを書く男というのはあなたの家に住んでいるんですよ」
私は自称警官の言ってることがいったい誰のことを言っているのか見当もつかずただ黙っていた。
「あなたが、ここへ住むずっと前から住んでいるんです。今でも痕跡が残っているでしょう？戻ってよく御覧なさい、分かるから」
そう言って警官はドアを閉め去った。部屋へ戻り私は夜のことを考えた。騒ぎ声が私の部屋から私だけに向って起こることが安易に想像でき、私はバックパックに着替えや当面生活に必要な物を詰め、陽が沈む前に家を出た。

時の流れはゆがむ

　恐怖の香りがした。
私は夕暮れの道を歩いていた。とるに足らない、ありきたりの、退屈極まりない、イラつくほど平凡な路地。歩く私。何の想いもなく現象を順追って浮かべるだけ。車と男の横を私は通り過ぎた。仕事用の車と仕事中の男。Ｔ字路の角を私は曲がった。突然非日常の香りがして、この世の登場人物が私と車と男しかいないみたいな感覚になった。その時間およそ２秒。Ｔ字路の新たな方向から見知らぬ登場人物がやって来た。私は２秒の間に、そうではなかった出来事を体感し、そうではなかった私のどうしようを味わった。

いたるところにぼく

　うとうとしていると、瞬間的にぼくは突然娘の心配をしたりする。ああ、いつかそんなこともあった。で、それをすぐに忘れてさ、あたち、お父さんに会いたい…ってなふうに寂しい気持ちになったりするんだ。ぼくは、お父さんでも娘でもないんだけどな。ぼくがいっぱいいるのかそれとも、なんでもかんでもぼくにしちゃうのかな？ぼくの見ている世界の壁紙はいつかべりべりってはがれるのかなぁとも思うんだ。
そうだ、はがれる前にちょっとだけのぞいてみよっと。
まぶしいな。もちょっとはがそ、べりべりべり。もうちょっと、まだ見えない、もう少し。よいこらせっと。…あらら全部はがれちまったよ。
うとうとうと、今度はどんなぼくかなぁ…。

もめごとダイジェスト

　めいっぱい、罵られていて、言い返す言葉を考えていた。人を罵るチャンスがやってきた。最上級の罵りを言わねば。てめえ、なめたまねしやがってぶちのめすぞ、ごるぁあ。くそゴミ野郎。さあ、言ってやろう、と息を吸ったら、なんかふつうに一人で歩いていた。仕事探さないと。なんで辞めたんだっけ。あ、人殴っちゃた、グーで。違います、私はライセンスなんてないです。応接室で男女が眠ってる。心中だよこれ、どうする？私の服ににおいがついてるって？熱く語る、このヒモはなんで必要かについて。相手が完全に引いてるので、話を続けようか考える。だから、私じゃありませんって。走ってるし、逃げてるし。妊婦になってるし。父親誰か分かんない。ちがうちがう、あんたのだんなじゃないって、やめてよ耳元で大声で騒ぐの。あたしの家だっけここ。山小屋みたい。崖に程近いじめじめした家。トイレにお風呂がついてる。うわあ、もうこんな時間。もう絶対間に合わない。自転車はパンク、ダッシュだ。子供にぶつかる。気絶してしまったので、かかえて走る。なんで？なんで入っちゃいけないの？なんで。あの人はよくて私はなんでダメなの？ああ、もう、昔のこと蒸し返すのやめて。怒りすぎて涙が出てくる。そこのお前、じろじろ見てんじゃねえや。気付いたらこの格好だったんだよ。そんな目であたしをみんな。ああ、運転してんだから視界さえぎるのやめて。もう、券取れなかったじゃない。歌なんか歌えないですって。捕まる。逃げる。昔、鳥だったころの気持ちで飛べと、誰かが言う。

ストーリーキャッチャー

http://p.booklog.jp/book/76535

著者：Kevin　Spring
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kevinspring/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/76535

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/76535

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ